
100円玉Love Story

綾瀬タカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

100円玉Love Story

【Nコード】

N2296B

【作者名】

綾瀬タカ

【あらすじ】

体育館裏の自動販売機に、私は昼休みレモンティーを買いに来るのが習慣だった。ある日、100円玉を投入しようとしたとき、「それ、ちょうだい」と声を掛けてきた男の子。それを渡したとき、私と彼の奇妙な関係が始まる……という高校生の女の子の青春を描いてみました。

（前書き）

短編を書こう！と思って書いてみたんですが、連載にしたいなと何
度か思いながら、やっと書けました（汗）
感想、評価なんでもお待ちします！！

高校の昼休みの時間、人があまり立ち寄らない体育館裏の自動販売機に、私は毎日レモンティーを買いに来る。購買はこの時間、長蛇の列を作っているし、学食のはあまり種類がない。

この体育館裏の自動販売機が存在を知っているのは、私だけだと思っていた。

夏の始まり、ある月曜日。

「それ、ちょうだい」

と、彼が指差した先には、私が今まさに自動販売機に投入しかけた１００円玉があつた。

「・・・これ？」

私は一瞬それに目をやったあと、彼の方を向いて言った。
すると彼は、「うん」と頷いた。

——このひと、何を言っているんだろう。

そう思いながら、私は１００円玉を彼に渡していた。

「はい」

「ありがとう。じゃあね」

と言って、彼は校舎のほうへ引き返して行った。

——飲みもの、買うんじゃないんだ。

おつりをひねると、ちょうど持ってきた１２０円の、先に投入していた２０円だけが、哀しく音を立てて落ちた。

次の日もまた、彼はやって来た。

「それ、ちよ
うだい？」

「これ？」

「うん」

「はい」

「ありがと。じゃあね」

気づけば1週間が過ぎて、私の500円は彼のものになった。

次の週から、月曜日の4限の体育が水泳になった。そのせいで着替えに時間がかかり、自動販売機に着いたのはいつもより10分ほど遅れたころだった。

もう帰っちゃったよね………と思いながら100円玉を投入しようとしたとき、

「
ねえ
」

と声を掛けられ、振り向くと彼がいた。

「まだ入れてないよね？」

「え？」

100円

「あ、うん……」

「じゃあ、それちょうだい」

「はい」

「ありがと。じゃあね」

その日はいつもより、会話が長かった。

それから月曜日だけは10分遅れるのが習慣になった。
彼も私に合わせて、見事に2週間、3週間と、100円玉をゲツトしていった。

もうすぐ夏休みになるうという日に、私は彼が100円玉を持って帰ろうとしたところを呼び止めた。

「ねえ」

彼は私のほうを振り向く。

「あと2週間で夏休みでしょ。そしたらどうするの？」
と私は言った。

けれど彼はそれに答えず、校舎へと歩いていった。

「夏休みになったら、もうあげられないよ……」

私は彼の背中を見つめながら、そう、呟いた。

次の1週間、彼は、一度も現れなかった。

各クラスでは夏休み明けにある体育祭の準備が進められていて、昼休みの時間は慌ただしくなった。

クラスの実行委員になった私は、レモンティーを買うつと、生徒会室へと急いだ。

「すみません、遅くなりました」

「大丈夫よ。時間なんて決まってるから」

と言ってくれたのは、生徒会の先輩だった。

「それにしても亜未ちゃんが実行委員なんて嬉しい。でも、どうせなら今年も生徒会に入ってほしかったな」

「あはは、すみません」

私は去年、生徒会で会計の仕事をしていた。というのも、高校に入学したての1年生から会計を選ばなければいけないくて、困った先生が「里中、おまえ中学のとき生徒会に入ってたろ。やってくれんか?」と、私に言っただからだ。

そのとき私は心底後悔していた。

入試トップなんて、狙わなきゃ良かった。そしたらこんなに目を付けられることもなかったのに、と。

とりあえず生徒会に入った私は、仕事をてきぱきと正確にこなすことで、先輩から可愛がられていた。当時の生徒会長には特に気に入られていたせいか、中学のときのような上級生からの呼び出しがなかったのは、ラッキーだった。

けれど、生徒会の仕事に時間を潰されるのは嫌だった。

だから私は2年生になつて、とても安心した。同じクラスに、前の会長から任命された新副会長がいたのだ。彼のおかげで、私にまで生徒会の話が回ってくることはなかった。

「会長。あたし、2年生になつたら生徒会には入らないで、自分の時間が欲しいんです。もっと恋愛とかしたいし」

と、前の会長に話しておいて良かったかもしれない。

夏休み前最後の1週間が始まった月曜日に、ふらりと彼はやって来た。

「それ、ちょうだい」

と、いつものように言って、いつもの会話のあと、帰っていった。私のあの質問には、全く触れずに。

私は、初めて少しだけ、彼のことが分かったような気がした。

彼のことを知ろうとしたら。彼に質問したら。

もう、ここには来なくなる。

この関係は、終わってしまうのだと。

先週、彼が来なかったのは、それを私に教えるためだったのだろうか。

まるで罰でも与えられたかのような長い1週間に、私は寂しさを抱いていた。

それから火曜日、水曜日と過ぎて、木曜日になった。

「明日は夏休み前最後の日。1カ月続いたこの関係も、終わっちゃうのかな」

そう思いながら、私は自動販売機へと向かう。

「結局あの人のこと、なんにも分かんないや。確かに同じ学校にいるはずなのに、1度も会えなかった」

彼を探そうとも考えたけれど、それをしてしまったら、たぶん彼は来なくなる。そう思って、やめた。

まず、20円を先に入れる。そのあと、100円玉を投入する。
「それ、ちょうだい」

「これ？」

「うん」

「はい」

「ありがとう。じゃあね」

去っていく彼の姿を見つめて、私は思った。

どのみち今日で終わりなら、私から終わらせたっていいじゃない。

どうせ、もう、終わってしまうのなら。

彼を、知りたい。

「ねえ！！」

彼が、ゆっくり振り返る。

「明日でどうせ終わるんでしょ。なら、ひとつだけ教えてよ。あなたの名前！！ 私は里中亜未、2年1組！！」

勢いよく飛び出した言葉たちが、風に流されていった。

彼のところまで、届いただろうか。

彼は何も言わず、校舎へと歩いていった。

もう来ない。きっと。

そう確信しているはずなのに、心のどこかで、なにかを信じている。

なにか、奇跡のようなことが起こるのを。

夏休み前最後の今日は、午前中に終業式をやって、昼休みを挟んだあと、体育祭の実行委員会に行かなくてはならなかった。終業式が終わると、一般の生徒たちは続々と下校の準備をしたり、部活に向かっている。

私は、来てしまった。いや、彼が来るようになるずっと前から、私がここでレモンティーを買うのは習慣なのだけれど。

その習慣に、彼が現れることも加わってしまったから。なにかが欠けてしまったみたいに、私の心は空しさを感じていた。

だけど、彼を知りたいと思ったこと、後悔していない。なにも言わずに彼の背中を見送っていたほうが、きっと後悔していた。

だから私は大丈夫。これからは1ヶ月前のように、元の習慣を取り戻していける。

先に、200円を入れる。

そして、100円玉を投入する。

ゴトトツと大きな音を立てて、レモンティーが落ちてくる。

「遅かった」

後ろから声がして、私は振り返った。するとそこに、彼がいた。

「100円、入れちゃったかあ」

彼は慌てて走ってきたようだった。息が上がっている。

もしかしたら彼は、本当はもう来ないつもりだったのだけれど、どうしても気になってやっぱりここに来たのだろうか。

いつもの時間よりも5分遅れてしまったから、私は100円玉を投入したあとだったけれど。

「遅くないよ」

と私は言った。そして彼の前に左手をズイツと差し出し、固く握られた拳をゆつくり解いていく。

「あ」

彼は思わず声を上げ、私を見た。そして、笑った。

私の手の平には、ほんの少しの期待とともに握り締められていた、100円玉があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2296b/>

100円玉Love Story

2010年10月8日15時14分発行